

研究ノート

## 温泉民俗学の可能性

### —湯浴みをめぐる習俗と伝承を中心に—

樽 井 由 紀

〔抄 録〕

日本には三千近い温泉地があると言われている。日本人は熱い湯に身体を浸すと気持ちがよく、疲れが取れ、気持ちよく感じ、熱い湯につかるのを好む。このように熱いお湯に入るのは世界では珍しく、日本独特の習慣、文化だといえる。本稿は「湯浴みをめぐる習俗と伝承」についての研究である。「湯浴みをめぐる習俗と伝承」とは、湯を浴びること、湯に入って身体を暖め、洗うこと、温泉に入って病気を治すことをはじめとして、湯治、温泉と共同湯など「湯」と関わる習慣、文化、入浴法、慣わしなどを含む一般的な習俗と伝承を指すと考えたい。

キーワード 温泉 民俗学 湯浴み 有馬温泉 湯女

### はじめに

日本には三千近い温泉地があると言われている<sup>(1)</sup>。温泉の歴史は古く、古代の文献には既に温泉の利用について記されている<sup>(2)</sup>。日本人は温泉の熱い湯に浸かるのを好み、熱い湯に身体を浸すと疲れが取れる、気持ちよいと感じる。このように、熱いお湯に入るのは世界ではめずらしいことで、明治政府の御抱え医師として来日したベルツ博士は日本人が風呂好きで、日常40℃前後の湯に入浴することについて驚いたという<sup>(3)</sup>。また、裸で他人と一緒に入るのも日本独特の習慣であり、他の国では温泉を利用する時には水着を着用する。

『風土記』に記されているように日本の温泉は「病気治療」から始まっており<sup>(4)</sup>、各地の温泉発見伝説には動物が傷を癒していたことが発端となった伝説が多くある<sup>(5)</sup>。そして、病気を治すことは仏教と結びつき、各温泉地には必ずといってよいほど薬師が祀られるようになった<sup>(6)</sup>。

風呂に入ることは我々にとって当たり前のことすぎて、温泉についての研究はあまりなされなかったように思う。これまでの温泉をめぐる民俗学的研究は、基本的には次の三点の視座からアプローチがなされてきたといえる。第一は民間医療としての視座から見た温泉療法とその

実態や伝承をめぐる研究、第二は温泉をめぐる民間信仰の研究、例えば薬師信仰、金精信仰など、第三は近年の観光振興という視座から温泉の有効性を探る、所謂、観光民俗学的研究をあげることができよう<sup>(7)</sup>。

以上の三点の動向からみて、これまであまり取り上げられることがなかった視座として「湯浴みをめぐる習俗と伝承」の視座からみた研究が挙げられるのではないだろうか。「湯浴みをめぐる習俗と伝承」とは、湯を浴びること、湯に入って身体を暖め、洗うこと、温泉に入って病気を治すことをはじめとして、湯治、温泉と共同湯など「湯」と関わる習慣、文化、入浴法、慣わしなどを含む全般的な習俗と伝承を指すと考えたい。日本には水浴によって一切の穢れが祓い浄められるという禊の思想があり。禊に用いる斎川水（ゆかわみず）が転化して湯になったといい、「ゆあみ」は「ゆかわあみ」で清いものを浴びるという意味とされている<sup>(8)</sup>。

さて、本稿では温泉、もしくは広義に「入浴（湯浴み）」を対象とした民俗学研究の可能性を探ることを目的とする。その際、主として「湯浴み」をめぐる習俗と伝承に焦点を絞り、人々の生活文化としての温泉・湯浴みを民俗学の視座から探求してゆく意義とその方法、および結果として得られるであろう成果について考察するものである。

次章では、「入浴（湯浴み）の習俗と伝承」について論じよう。

## 1. 「入浴（湯浴み）の習俗と伝承」

江戸時代の旅行ハンドブック『旅行用心集』（1810）<sup>(9)</sup>には旅行の心得と共に諸国の温泉についての案内が添えられている。その最初には五畿内が置かれ、摂津の温泉として温泉地の浮世絵とともに有馬温泉が詳しく説明される。このような詳しい記述は他の温泉の紹介には見ることができない。そして温泉案内の大半を占めるのが、湯女についての情報である。有馬温泉では湯女は温泉と宿をとりもつ重要な役割を担い、「有馬湯でもつ湯は湯女でもつ」と評判を呼んだ。有馬温泉の湯女は湯治客に入浴の順番を知らせ、送り迎えをするなど、まさに湯浴みを司る役割を担った、温泉経営になくはならない存在だったのである。

寛政期（1780年代後半から1790年代）には岡本昌房（生没年未詳）による「湯女風俗絵」連作が土産物として販売されたことから、18世紀後半、湯女は有馬温泉で人気があり、有馬温泉の華やぐ存在、アイドル的存在であったことがわかる。その後、美人画で有名な歌川国貞（初代）が五渡亭国貞を名乗っていた頃、全国の美女を集めた「浮世名異女図会」（文政年間の1820～1825?）<sup>(10)</sup>の中に「摂州有馬湯女」として描かれた（図1）。大坂の絵師である画登軒春芝<sup>(11)</sup>が、この国貞の作品を文政年間後半（概ね1820年代）に模倣するなど（図2）、有馬温泉の湯女の評判は非常に高かったことが伺える。

湯女は足利時代に風呂の流行と共に登場したと言われている。一般的には湯女は温泉や湯屋で働く女性で遊女に近いと理解され、温泉の湯女と湯屋の湯女が混同して理解されるという傾

向が多かった。「湯女=ゆな」の語源について武田は「浴堂を管理する役僧があり、これを湯維那といい（略）この湯維那を略して湯那とも称した。後に湯女の語源にもなる」<sup>(12)</sup>としているが、武田も銭湯の湯女と温泉の湯女に区別はなく同様のものと考えているようにうかがえる。

有馬温泉の湯女は、豊臣秀吉から扶持米が与えられたと伝えられ、「湯女は昔は白衣紅袴の装束をつけ、歯を染め眉をえがき、あたたかも上臈のやうな姿

をして、専ら高位高卿の入浴の際に、その座に待つて或は碁を囲み琴を弾き、または和歌を詠じ」<sup>(13)</sup>る教養の高い女性で、単なる下女ではなかった。

有馬温泉の浴場は「間口三間奥行一間半の湯殿双方に有、（略）湯槽幅の広さ一丈二尺五寸、奥行二丈一尺、此真中に隔あり、一之湯二之湯尻合せに有り」<sup>(14)</sup>とあるように温泉は源泉を二つにわけた一之湯と二之湯があり、浴槽は3.18m×3.79mという狭いものであった。江戸時代には全国から集まった湯治客が「春秋来客多し盛ニハ五千人ニ及ふと云」<sup>(15)</sup>とあるように、春、夏の繁忙期には5千人もが利用するため、入浴には時間の制限と順番を守る必要があり、それを「日に三度入湯の時刻十軒の本坊ハ湯女客座舗へ来り案内をなす」<sup>(16)</sup>と浴場への案内を取り仕切ったのが湯女だった。「客衣類をぬぐと湯女後より浴衣を着せ入湯するなり。諸宿の湯女をはじめ、下女、下男に至る迄多く集まり居て、我事の客の衣類・浴衣・下駄まであづかり、其客の上がり来るを侍居るなり。」（句読点は著者による）と『滑稽有馬紀行』（1827）<sup>(17)</sup>にあるように、湯女は甲斐甲斐しく、女郎でもなく、上臈でもなく、遊女でもなく、温泉管理の必須の労働として湯治客の世話をした。

次章では湯女の役割の変化について見ていこう。

## 2. 近世における湯女の変遷

結城屋来示（又四郎）の作と伝わる『吉原徒然草』<sup>(18)</sup>は元禄末～宝暦初（=18世紀の初頭）のものだが、その72段に「有馬のふぢ、伊香保の江川」と有馬温泉の20坊のひとつ、素麺屋の小湯女の名前があげられている。ふぢは「松になりたや、有馬の松に 藤に巻かれて寝と御座る」と有馬節にも歌われる悲恋のヒロインである。ふぢは非常な美貌の持ち主で、湯治に来ていた京都の商人の松屋某と恋に落ち、結婚の約束をする。しかし男は大店の跡取り息子、ふぢ



図1. 国貞「摂州有馬湯女」浮世名異女図会シリーズ 文政4（1821）頃 ポストン美術館



図2. 画登軒春芝「摂州有馬湯女」藤懸静也『増訂 浮世絵』雄山閣1946

と結婚することはならず、棄てられたふちは生瀬川に身を投げた<sup>(19)</sup>。その噂が世間を騒がせたのであろう。武田は二之湯のふちを大湯女としているが<sup>(20)</sup>、大湯女はどの坊の湯女もかかと呼ばれ、代々の通り名を持っていたのは小湯女であるので、武田の記述は正確とは言えない。

祇園でも有馬湯女の評判は高く、享保の頃の「道念ぶし」には「有馬湯女名寄」と有馬の小湯女の名を唄ったものがある。また、半太夫節正本集「有馬山湯女の巻き筆」<sup>(21)</sup>にも有馬の小湯女の通り名をあげながら綴られており、祇園祭の際に祇園の芸妓が扮装をこらしてパレードを行う「練り物」にも安永3、1774年代「有馬湯女」が登場する<sup>(22)</sup>。また、近松門左衛門の浄瑠璃「百合若大臣野守鏡」（宝永7年（1710））にも有馬温泉の様子と湯女について詳しく説明されている<sup>(23)</sup>。大都市など他所から見れば、珍奇な接客女性とみられがちであっただろう。湯女はこのようにして人気ものになっていく。

### 3. 温泉のアイドルとしての湯女

『有馬手引草』には各坊とその湯女の通り名を詠み込んだ発句が見られ、湯女の名を読みこんだ有馬ぶしがあり、「迎湯有馬名所鑑」には各坊と湯女の名前を読みこんだ狂歌がある<sup>(24)</sup>。ように有馬温泉の湯女は宿泊する坊とセットで知られるようになった。18世紀後半には湯女の錦絵は土産物として販売された。作者は大阪の岡本昌房（生没年未詳）<sup>(25)</sup>、天明末から寛政期（1780年代後半から1790年代）の作品と考えられる<sup>(26)</sup>。有馬温泉では安永2年（1773）に大火があり、湯泉神社、薬師堂、極楽寺等が焼失している。温泉地の復興のために、「湯名風俗絵」は販売されたのかもしれない。

「湯女風俗絵」連作は、現在7作品が知られており、うち尼崎坊ゆりは山口県萩美術館のチョコチンコレクションに、大黒屋たけと水船のつじは大英博物館に収蔵されている<sup>(27)</sup>。7点のうち3点は白黒図版しか知られていない。各作品に共通して「雪圭斎昌房画讃」「湯女風俗絵売所 有馬小山屋源八」と記されている。

「湯女風俗絵」には帯は人妻風だが、眉を落とさない、ユニークな出立の湯女が描かれ、昌房の狂歌の「讃」が添えられている。湯女の背景にはそれぞれ異なる花が描かれる。人物が花に囲まれて登場するのは、昭和の少女漫画によくみられる構図だが、「湯女風俗絵」の小湯女たちもそれぞれに異なる花を背負って描かれる。例えば兵衛のみやの背景には梅の花が咲き誇り、大黒屋のたけには芍薬、尼崎坊のゆりは百合の花に囲まれている。御所坊のまきには桜が咲き、「櫛まきの とりあげ髪 の うずだかふ 冠下たか と 見ゆる 御所の 坊」という讃が添えられている。櫛巻きというのは女性の髪形のひとつで、髷を櫛でくるくると撒いた、髷の中では簡単にできるものである。宝暦年間（1751-1764）に浅草寺参りの客に愛された名物娘の湊谷お六が結って流行したものである<sup>(28)</sup>。「湯女風俗絵」が描かれた寛政期の少し前に流行った髪形なので時代的に一致する。



図3は山口県立萩美術館・浦上記念館蔵に筆者が実見した尼ヶ崎坊ゆりの図である。ゆりは百合の花に囲まれており、清楚で可憐な印象を与える。描かれた指の細さ、着物の裾から見える素足の指も華奢で、少女の若さ、瑞々しさ、愛らしさを伝えている。湯女は客を浴場へ案内するため、冬でも素足であったようだ。添えられた「讃」は「色まさる すがたかたちは姫ゆりの はなにかん路のあまが崎坊」とあり、樹葉から樹木を潤す甘い汁が垂れ、辺りに甘い香りを発しているようである。遊女ではなく、愛すべきアイドルとして描かれている。



図3「湯女風俗絵」  
尼ヶ崎坊 ゆり  
山口県立萩美術写真・浦上記念館蔵

#### 4. 「湯女風呂の湯女」

有馬温泉での湯女の風俗が、他の温泉地にも広がったが、呼称は地域によって異なる。例えば、加賀の山中、山代温泉では湯女を「獅子」と呼んだ。山中温泉の『山中節』にも「鉄砲かついで来た山中で、獅子も撃たずに帰るのか」というのがあり、湯女がそういつて客をひき留めたとされる。加賀の湯女の起源については、戦国時代、戦に敗れ主を失った落武者達がこの地方にたどりつき、ひそかに隠れ住んでいたが、生計に困りついにその妻や娘が俗にいう一旦風呂敷の浅黄地を、かつぎのように頭から冠り、街に出て浴客の袖を引き、売色したという。その姿があたかも獅子舞の様子に似ているので獅子と呼ぶようになった。これが湯女の始まりであると言われている<sup>(29)</sup>。

また、有馬温泉の湯女は一般庶民のための「町風呂」にも影響を与えることになる。湯女風呂は、江戸のはじめの慶長年間に始まったと言われるが、確かではない。その形態は一種の茶屋で酒を提供し、風呂場があり、客を入浴させ、垢かき女を「湯女」と称し、酒の相手もした。後には色を売るようになったところから私娼家と看做されるようになった<sup>(30)</sup>。そのような湯女の発達各地の温泉が始まりであった<sup>(31)</sup>。このように、江戸の「湯女風呂」の登場で、有馬温泉の湯女には遊女のイメージがつきまとうようになり、ひいては、その後長く温泉、風呂そのものに遊興のイメージがつきまとうようになった。

温泉地は高度経済成長期以降、大型化し、団体客中心の一泊二食型旅館経営が主流となり、大衆レジャーとして、一泊二食宴会型温泉が定着した。温泉の利用者・形態は、成人・男子・団体中心であり、週末には男性社員のための社内旅行で賑わい、歓楽街的な役割を担うことになった。

## 結論

これまでの研究は、どちらかといえば医療・健康・民間信仰・観光もしくは経済効果などが中心的題材とされ、「温泉」・「湯」あるいは「湯浴み（入浴）」そのものに焦点をあてた研究ではなかったといえることができるだろう。このような研究の潮流を見る限り、筆者は、これからの温泉をめぐる民俗学的研究には、「温泉」や「湯浴み（入浴）」を直接の題材とした視座からの研究が必要ではないかと考える。それがまさに「湯浴み（入浴）をめぐる習俗と慣習」に焦点をあてた研究ではないだろうか。本論文ではその一事例として、「共同浴」と「温泉地における湯女の役割とその変化」について取り上げた。これらをテーマとした研究はまだまだ始まったばかりであり、今後はより多くの事例の集積とその分析が必須であることはいうまでもない。さらにこれら以外でも、「湯浴み（入浴）をめぐる習俗と慣習」に焦点をあてた研究の可能性は残されていると思われる。これらの課題を克服した先に、ようやく「温泉民俗学」とよぶべき一研究領域が確立するものといえよう。筆者は、今後はその実現に向けてより精進してゆかねばならないと考えている。

ところで、先述の湯女の変遷からみても明らかなように、戦後、高度成長期の温泉は男たちの性的な興味関心を満足させるような場として、遊興地化したといえる。江戸時代の湯女風呂のように、温泉地では羽目はずしても構わないというような風潮が漂っていたのである。しかし1980年代以降は、温泉地を訪れる人々は、それ以前の男性を中心とした団体客から、若年者や高齢者、女性、個人や小グループ客へと変化し、障害者が利用しやすい施設も増加した。そこでは、温泉地は性的なイメージの払拭に努力し、温泉街は清純化した。近年は外国人誘致に努力する城崎温泉のような例も見られる。しかし北陸の温泉街では、女性客や家族連れのための宿泊棟と男性客グループのための棟を分け、今日でもまだ男性客に性的な相手を紹介する組織があると聞く。このような近年の温泉地の質的な変化を見ると、温泉は現代風俗研究の対象として格好の題材であるとも考えられる。よってこれからは、「湯浴み（入浴）をめぐる習俗と慣習」に焦点をあてた研究以外にも、このような視座による温泉研究にも注目してゆかねばならないだろう。

### 〔注〕

- （1）環境省HP平成29年度温泉利用状況には温泉地の数は2983と報告がある。[https://www.env.go.jp/nature/onsen/pdf/2-4\\_p\\_1.pdf](https://www.env.go.jp/nature/onsen/pdf/2-4_p_1.pdf)
- （2）荻原千鶴 2014『出雲の風土記全訳注』講談社には薬湯、神の湯として温泉が記されている。
- （3）安井宏 1995『ベルツの生涯 近代医学導入の父』思文閣出版 245頁
- （4）柳田國男も「温泉はイハバ天然ノ病院ナリ」と述べている。柳田國男『山鳥民譚集』（甲寅叢書刊行所1914）なお、引用は『柳田國男全集』5（筑摩書房1998）63頁による。
- （5）温泉発見伝説については齊藤純の研究がある。齊藤純 2006「温泉発見伝説—湯と聖地—」『群馬歴史民

俗』第27号、群馬歴史民俗研究会

- (6) 大森恵子は薬師信仰の研究「因薬薬師と山陰地方の薬師信仰」の中で、温泉地に祀られる薬師如来に人々が病氣治癒を願う、庶民信仰について記している。例えば湯村温泉の「近在に住む老婆の話によれば、湯村温泉の湯に入れば、特に皮膚病や婦人病・神経痛などの効能があるとされ、昭和三〇年頃まで、近在の人々が田畑の仕事が暇になると、先ず正福寺の薬師堂に参詣し、病氣平癒や厄除けを祈願してその後で温泉に入湯するのが常であった」と紹介されている。(大森恵子 1989「因幡薬師と山陰地方の薬師信仰」(五来重編『薬師信仰』雄山閣 435頁)
- (7) 温泉の祭の研究には、菅野剛宏の「湯の力、人びとの暮らし—温泉の民俗学」がある。温泉の祭を紹介し、各地の温泉祭りの多くはイベント的性格をもっていると温泉の祭が観光と結びついていることを指摘している(菅野 2011、2)。さらに菅野は、温泉地の土産物についても紹介している。
- (8) 木暮金太夫「日本の温泉の歴史」日本温泉協会監修『絵葉書と鳥瞰図で見る日本の温泉』平成4年 181頁、国書刊行会
- (9) 『旅行用心集』は文化7年(1810)八隅蘆庵著、桜井正信 2001『現代訳 旅行用心集』八坂書房参照。
- (10) 「浮世名異女図会」は藤懸静也 1946『増訂 浮世絵』雄山閣 258頁参照。
- (11) 画登軒については前掲(10) 202頁参照。
- (12) 武田勝蔵 1967『風呂と湯の話』壇新書 19頁
- (13) 小澤清躬 1938『有馬温泉史話』五典書院 75頁
- (14) 辻本清蔵 1915『有馬温泉誌』大阪活版印刷所 503頁
- (15) 拙稿 2018「江戸中期の温泉旅行案内—東京国立博物館蔵古地図より」『歴史学部論集』第8号 佛教大学 39-48頁
- (16) 前掲(15) 46頁
- (17) 板坂耀子編 1987『江戸温泉紀行』東洋文庫472 平凡社
- (18) 上野洋三校注 2003『吉原徒然草』岩波書店 92頁
- (19) 前掲(13) 85頁
- (20) 前掲(12) 112頁
- (21) 風見恂 1988『有馬温泉史料』下巻 名著出版 56頁
- (22) 福原敏男・八反裕太郎 2013『祇園祭・花街ねりものの歴史』臨川書房(臨川選書28) 52頁
- (23) 近松全集刊行会 1987『近松全集 第七巻』岩波書店 371頁
- (24) 横山重監修・森川昭解説 1975『有馬地誌集』所収 260-270、277-291頁
- (25) 岡本昌房については『浮世絵大成』第三巻 東方書院 7頁に詳しい。
- (26) 榎本雄斎 1970「裏表紙解説 岡本昌房画『尼ヶ崎坊 ゆり』」『浮世絵芸術』24号 11頁
- (27) 拙稿 2016「浮世絵に描かれた有馬の湯女—その装いと仕事の変化について—」『温泉地域研究』第26号 日本温泉地域学会 18-19頁
- (28) 村田孝子 2007『江戸300年の女性美 化粧と髪型』青幻舎 72頁
- (29) 西川義方 1943『温泉言誌』人文書院 48頁参照のこと、西川は山代温泉では「太鼓の胴」、山中では「ゆかたべ」とも呼ばれ、方山津では「鴨」、別府では「鴨おし」、伊豆では「牛」とよばれたとも記している。
- (30) 中野栄三 1970『銭湯の歴史』雄山閣 86頁
- (31) 前田健太郎 1929『東西温泉物語』浴場新聞社 67頁

〔参考文献〕

板坂耀子編 1987『江戸温泉紀行』東洋文庫472 平凡社  
上野洋三校注 2003『吉原徒然草』岩波書店  
榎本雄斎 1970「裏表紙解説 岡本昌房画『尼ヶ崎坊 ゆり』」『浮世絵芸術』24号  
大森恵子 1989「因幡薬師と山陰地方の薬師信仰」(五来重編『薬師信仰』雄山閣)  
萩原千鶴 2014『出雲の風土記全訳』講談社

- 小澤清躬 1938『有馬温泉史話』五典書院  
風見恂 1988『有馬温泉史料』下巻 名著出版  
菅野剛宏 2011「湯の力、人びとの暮らし—温泉の民俗学」（日本温泉文化研究会『温泉を読む』講談社現代新書  
桜井正信 2001『現代訳 旅行用心集』八坂書房  
武田勝蔵 1967『風呂と湯の話』壇新書  
樽井由紀 2013「温泉地における薬師堂の管理—松之山温泉の事例—」『温泉地域研究』第21号 日本温泉地域学会 21-30  
樽井由紀 2014「温泉の効能から見た伊香保温泉の近代化—温泉番付、錦絵、温泉案内書をてがかりに」『観光学術評論』Vol2-2 観光学術学会  
樽井由紀 2016「浮世絵に描かれた有馬の湯女—その装いと仕事の変化について—」『温泉地域研究』第26号 日本温泉地域学会 13-24  
樽井由紀 2017「仏教寺院の温泉、共同浴への影響について」『歴史学部論集』第7号 佛教大学 98-110  
樽井由紀 2018「江戸中期の温泉旅行案内—東京国立博物館蔵古地図より」『歴史学部論集』第8号 佛教大学 39-48  
辻本清蔵 1915『有馬温泉誌』大阪活版印刷所  
東方書院 1931『浮世絵大成』第3巻 東方書院  
中野栄三 1970『銭湯の歴史』雄山閣  
西尾正仁 2000『薬師信仰—護国の仏から温泉の仏へ』御影史学研究会民俗学叢書13 岩田書院  
西川義方 1943『温泉言誌』人文書院  
福原敏男・八反裕太郎 2013『祇園祭・花街ねりものの歴史』臨川書房（臨川選書28）  
藤懸静也 1946『増訂 浮世絵』雄山閣  
八木 透 2015『京のまつりと祈り』淡交社  
前田健太郎 1929『東西温泉物語』浴場新聞社  
村田孝子 2007『江戸300年の女性美 化粧と髪型』青幻舎  
横山重監修・森川昭解説 1975『有馬地誌集』勉誠社  
吉田集而 1995『風呂とエクスタシー』平凡社

（たるい ゆき 佛教大学非常勤講師）

2019年11月15日受理